2025年12月14日礼拝説教

《テーマ》「あなたはこのことを信じますか」

《みことば》ヨハネ11章17-27節

イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」（11:25-26）

《メッセージ》ベタニア村のラザロが病気になったとき、
マルタとマリアの姉妹はイエスに使いを送ります。
知らせを受けた２日後、イエスはベタニアに向けて出発しました。

## 1．弟子のとまどい

イエスが「もう一度ユダヤに行こう」と言われたとき、弟子たちは乗り気ではありませんでした。その理由は理解できなくもありません。イエスが直前にエルサレムを訪問した際、神を冒涜したとして「ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げ」ました（ヨハネ10:31、「再び」とあるのは8:59にもあるから）。人々はイエスを捕らえようとしましたが、イエスはヨルダン川東岸に逃れていました（10:39-40）。弟子がユダヤ行きに難色を示したとき、イエスは不思議なことを言われました。

「昼間歩けばつまずかない。この世の光を見ているから」（11:9）。神とともに歩んでいるなら神の光が照らすのでつまずかない、という意味です。イエスは神とともに歩み、神の御心に従ってエルサレムに向かいます。それに反して、弟子たちは神の御心を求めておらず、恐れてユダヤに向かうのをためらいます。そのような歩みは暗闇でつまずくのと同じです。「主は私の光、私の救い。だれを私は恐れよう」（詩篇27:1）と言われます。聖書でもっとも長い章は詩篇119篇です。全176節にわたって、神の言葉に従う祝福を語っています。「あなたのみことばは私の足のともしび、私の道の光です」（詩篇119:105）は、光の中を歩く大切さを語ります。*（ちなみに、聖書でもっとも短い章は詩篇117篇、もっとも短い節は今日読んだヨハネ11:35「イエスは涙を流された」です）*

## 2．マルタへの取り扱い

イエスがやって来たとき、マルタが迎えました（11:20）。悲しみの中にあってもイエスをお迎えする彼女の姿勢は私たちの模範です。マルタは「ここにいてくださったら、ラザロは死ななかったでしょう」と言います（11:21）。もちろんそこに彼女の落胆が見えますが、しかしマルタはイエスがいやし主であること、そして「イエスが求めることに神は答えてくださる」という信仰を告白しています。イエスが「あなたの兄弟はよみがえります」と言ったときも、「終わりの日によみがえることを知っています」と返答します（11:23-24）。

イエスは彼女にすばらし真理を伝えます。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません」（11:25-26）。イエスはマルタに３つのことを教えられました。

① マルタはよみがえりの知識を持っていました。しかし、それは神学的な知識であり、いまの自分に適用されていませんでした。主が語られることは教理や未来ではなく、いまの私たちに関わること

です。

② イエスは「死んでも生きる」と言われました。「死」という目に見える現実を乗り越える真実を主は教えたのです。終わりではなく、そこから永遠へとつながっていく神の働きがいま私たちの前に起こっています。

③ そして、最後に「あなたは、このことを信じますか」と問われました（11:26）。理解や納得から、信仰へと主は導いてくださいます。私たちにも「信じますか」と問われます。

こうして彼女はもっとすばらしい信仰告白へと導かれます。「私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております」（11:27）。

## 3．マリアへの取り扱い

イエスはマリアを呼び、マリアもイエスのもとへ行きました。マルタは自分の信仰をイエスに伝え、一生懸命イエスと話し合ったのですが、一方のマリアはどうしたでしょう。「イエスがいてくださったらラザロは死ななかった」という言葉は同じでしたが、マリアは今回もイエスの足もとにひれ伏して泣いていました（11:32-33）。イエスは人を苦しめる死と、不信仰なユダヤ人に憤りを覚えつつも、マリアの悲しみを見て、涙を流されました（11:35）。

イエスは、マルタには会話を通して彼女の信仰と理解を引き上げられましたが、マリアに対しては、その悲しみを受け止め、共感し、寄り添ってくださったのです。神は私たちの悩み、苦しみ、痛みを理解し、受け止めてくださるお方です。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」（ヘブル4:15）マルタとマリアは、奉仕と礼拝、行動と交わりを表すとともに、信仰と感情をも代表します。私たちには両面があります。神は「このことを信じますか」と私たちに信仰を求められますが、しかし同時に私たちの感情をも理解し、慰めと励ましをくださいます。

## 4．絶望から栄光へ

イエスがいたところからベタニアまで約30キロ、徒歩で１日の距離です。ラザロが病気であるとの知らせが届くまで１日、イエスが２日待って出発し、ベタニアに着くまでに１日。到着したときラザロは墓に入って４日たっていましたから、姉妹が使いを出した直後にラザロは亡くなったと考えられます。当時の人々は、人の魂は死後３日はその人のところにとどまると考えたそうですから、４日は人間の望みが完全に断たれる期間です。しかしイエスは「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか」と言われます（11:40）。人々が墓をふさいでいた石を取り除けると、イエスは神に感謝の祈りを捧げます。マルタが言ったように、「父よ、あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださる」とイエスは祈りました（11:41-42）。5000人の給食の際にも、イエスは父の祝福を祈ってからパンを裂きました。神の祝福があるところに、神のわざが起こります。

イエスが「ラザロよ、出て来なさい」と大声で叫ぶと、ラザロは布にまかれたまま墓から出てきました（11:43-44）。確かに神の栄光が表されたのです。

ラザロの復活により、ユダヤ人たちはイエスの殺害を決定しました（11:53）。他人を復活させて自分を死に追いやるとは皮肉な結果だと言う人がいるかもしれませんが、ラザロの復活はただ死者の復活というだけでなく、イエスが十字架にかかって救いを成し遂げることにより、もっと大きな神の栄光へとつながっていくのです。